

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

農学における国際交流

久馬 一 剛

〔京都大学農学部長・元京都大学国際交流委員〕
農学部教授・農芸化学教室

国際交流は時代のキーワードの一つとなっていて、ムードとしてはわかったような気になるものの、この言葉で表そうとしている中身は人によって必ずしも一様ではないように思う。ここでは自分の経験をもとにして、国際交流とは何なのかを考えてみたい。私が大人になってから初めて訪れた外国はアメリカ合衆国であった。ロックフェラー財団のフェロシップをもらって、ノースカロライナ州立大学ヘポストドックとして留学したのは32年も昔のことであるが、留学した当時の心のときめきと、人も土地も生活もすべてがフレッシュで、みずみずしい感性をもってそれらを受入れようとした日々の思い出は今も新鮮である。もちろん、言葉がよく通じない、心がよく通い合わない、食べ物が口に馴染まない、などなど辛いこともあったが、それだけにそんな時に人から受けた親切は心に染みるものとして記憶に残っている。また、今に至るまで、例えば日本の大学や大学院の教育や組織の在り方を考える時に、比較の基準となるのは自分の見たアメリカのそれであり、初めて留学した国や大学のもつ影響力の大きさを実感している。

その後、東南アジアと南アジアの各国へ水田土壌の調査や、焼畑の研究で頻繁に出かけることになり、そこでも沢山の友人や知己を得た。所変れば品変ると言うが、それぞれの土地に、それぞれの人の生き方や物の考え方があることを知ることができたし、それとは逆に、泥んこになって一緒に穴を掘り、調査をしている間に、外国人同志であることを忘れてしまうような経験もした。今でも忘れられないのは、田舎の人たちの優しさ、親切さである。穴掘りで汗をかいているのを見ていた人たちが、食べ物や飲み物をもってきて振る舞ってくれたことも一度や二度ではない。もっとも、そうして頂戴した水牛のミルクにあたって慌てたこともあったが、それも感謝と懐かしさをもって思い出すことの一つである。サラワクでイバンの人達のロングハウスに泊めてもらった夜に、手作りの米ジョウチュウをご馳走になりながら見せてもらった、昔の首狩時代の剣の舞も、それとは不釣り合いな人々の柔和な印象とともに、未だに忘れられない。

文化相対主義という言葉がある。文化に優劣の差はなく、それぞれが固有の価値をもつという主張であるが、国際交流と言うのは、つまるところ、外国人同志がそれぞれにとって固有の価値である文化を尊重し合い、少しでもそれをよく知ろうとすることなのではないかと思う。もっとも、外国の文化をよく知り、本当に理解するということは、それほど容易なことではない。だからこそ国際交流が声高に叫ばねばならないのかも知れないし、やはりそのために個人としても機関としても努力を続けなければならないの

であらう。

外国の文化の理解という捉え方をすると、農学における国際交流は他の分野におけるそれよりも有利な点が多いといえるだろう。なぜなら、農学が地域特異性をもつ農業を相手にしており、ある種の文化相対主義的な考え方を前提としているということがあるし、フィールドでの研究にウエイトが置かれることから、私が個人的に経験したように、外国の人や土地を生そのままで見ることが多いということもあるからである。特にわが農学部の一つの大きな特徴として、伝統的に外国の農業に関する調査研究活動が盛んなことを挙げることができるが、このことが外国を知る農学部のスタッフの数を増やすと同時に、多くの外国人研究者や留学生を迎え入れることにも繋がっており、一層交流の密度を高める結果となっている。

そういう農学に特有の事情を反映してか、農学部は京大の他学部に比べても、国際交流に力を注いでいるという評価を受けることが多い。このニュースレター一つをとっても他にないものであるし、留学生室を中心とした留学生のためのガイダンス、英語の講義、見学旅行などの活動もユニークであって、そのために多くの人が払っている努力に対しては敬意と感謝の他はない。しかし、今後ますます国際的な交流は活発化して行くと思われるし、留学生や訪問研究者の数も増えるであろう。それに対してはそれなりの制度的な対応が必要なことはいうまでもないが、やはり大事なことは農学部の構成員一人一人の交流に対する積極的な参加意識であると思われる。わが農学部が、国際交流を通じて、世界に開かれた農学研究のセンターであり続けることを願ってやまない。



外国人留学生歓迎パーティーで挨拶される筆者
(平成5年4月撮影)

京大生協での留学生むけのとりくみ



小塚 和行

(京都大学生協同組合 専務理事)

生協の店舗や食堂にも年々留学生の利用者が増えてきました。以前は、生協加入のカウンターに日本語が余り話せない留学生が来ると、生協職員のあいだで「あなた英語話せる？」などと譲り合っていました。今は留学生の加入も珍しくなく、またそのための説明文も用意しているので、このような光景はなくなりました。さて、News Letter への寄稿の機会をかりて、京大生協での留学生に向けたとりくみの現状と今後について紹介させていただきます。

生協の留学生への事業の現状

留学生も京大のなかで生協の食堂や店舗を利用する機会が多いので、まず生協加入の手続きをしていただきます。国内の一般学生は、50口20,000円の出資金を加入時に出していただいています。留学生の場合は経済事情や在籍期間を考慮して10口4,000円から加入できるようにしています。

食堂では1983年以来、メニューのローマ字併記と、肉料理については肉の種類を絵で表現することをこなしています。これは日本語の読めない留学生や宗教上の理由などで食べてはいけない肉を使用している料理を知りたいという留学生からの要望に応えたもので大変好評です。

このほか、下宿の斡旋、学生総合共済の加入受付などを行なっています。学生総合共済は組合員どうしの助け合いの制度として日本人学生の約8割が加入しています。病気や事故の入院は1日目から4,000円が給付されます(MG型)。病気による入院をはじめ、実験実習中のケガ、スポーツ中のケガ、アルバイト中のケガなど学生生活の24時間を保障しています。この共済には、留学生も加入できます。留学生の場合は火災共済単独の加入も可能です。

留学生向けの事業の充実をめざして

上にあげたようなことが留学生に関わって生協で現在行なっている事業です。余り特別なことはせず日本人学生と同じように対応している、利用していただいているというのが実情です。しかし、学内に留学生が増え生協の食堂などでの留学生の利用者が増えてくる中で、生協としてももっとやることのあるのではないかと考えています。

特に、留学生のための下宿の確保が強く求められています。留学生の受け入れ可能という物件がまず大変少ないことです。一方で留学生が求めるトイレ、キッチン、シャワーの設備がついて部屋代がある程度安いという物件も極めてわずかしかありません。留学生を受け入れるには生活習慣の違いに対応した最低必要な設備は整える必要がありますが、高い固定資産税と回収費用を払って、それを留学生の

家賃で回収する事は現実的には困難です。ですからこうした問題を家主の意識の変革や善意に期待するだけでは、解決できません。京都大学をはじめ立命館、同志社大、龍谷大など私立大学も留学生が増えている中で、「大学の街」「国際都市」京都の問題として、大学と行政と市民が協同で取り組む課題だと思います。京都の大学生協では、学生向けマンション開発のための総合リビング事業を協同で始めましたが、今後京都市とも協力して京都に学ぶ留学生のための住宅開発や家主への資金援助制度などをすすめていきたいと考えています。

協同組合の精神を生かして、生協の中に留学生委員会を作りたと思っています。留学生の組合員が集まって、自分達や仲間の大学生生活を改善し充実するためにいろんな知恵を出し合い、できるところからとりくんでいくのです。例えば、留学生のみなさんが生協の店をもっと上手に利用するために、「留学生から見た」「留学生のための」「留学生の手による」生協利用ガイドを作ることはどうでしょうか。それもそれぞれの国の言葉で作ったら大変楽しいと思います。「らいふすてーじ」(生協の機関誌)は毎月1万部を発行しており、学内の情報誌として多くの方に読まれています。この中に「留学生のページ」を作れないでしょうか。これも留学生委員会で話し合って編集したら大変おもしろいと思います。この他にも、生協の食堂メニューへの要望を出し合ったり、あるいは各国の特色ある食事を紹介して食堂のメニューとして提案したり、いろいろ楽しい活動ができると思います。

今日本の大学生協は、海外の(特にアジアの)国々の大学生協との交流や活動の支援をすすめています。タイ、フィリピン、インド、インドネシア、韓国などの国では、自国の大学での協同組合の事業を活発にし大学生生活を豊かにしたいという思いから、日本の大学生協の事業活動や組合員の活動に学ぼうという活動がひろがってきます。日本に留学している学生のみなさんが、大いに大学生協を利用していただくと共に、留学生委員会の活動を通じて仲間との交流や協同の体験をすること、生協についての理解を深めることができれば、自国の大学での協同組合の発展にも寄与できるのではないかと思います。

私達生協に農学部の留学生との交流の機会を与えていただいた、西村博行教授がこの春が定年退官されます。先生から相談を受けていた「卒業式用のガウン」づくりがまだ宿題として残されていますが、これも早く実現したい課題の一つです。

留学生の眼 (10)



How can we get a real joy and peace in foreign student life?

Seong-Gu Hwang

(Division of Animal Science, Korea)

It is a great pleasure for me to talk about my foreign student life in Japan. My heart is filled with thanks and joy

for everything during my staying in Japan.

Five and half years! It can be expressed in a word "time flies". Since October 1988, I just kept on running toward the goal, the doctoral degree. Of course, I am not an able man in doing anything. I dare say that's true. At the same time, I am not well accustomed to enjoy the life. So that, I was behind the pile of school works, though the results were not so successful and satisfactory. Sometimes, I remember the conversation with the Japanese Ambassador in Korea when I was invited to the Japanese Embassy just before coming to Japan. At that time, I told him that I will study very hard if I go to Japan. But, he told me to learn what the country Japan is like through having many chances to know customs and the way of thinking of Japanese. However, it was really difficult for me to save the time for having those opportunities during my student life in Japan. Really time has gone too fast to aware what I've been doing during such a long time. I sometimes felt like going somewhere out of town. Not even that! Sometimes I felt, and I know that I needed rest and relaxation time. However, I failed to have such a relaxation. After all, as many foreign students know well, our body is laid under so called stress situations for adaptation to new atmosphere, weather and custom. Actually, I have been in the hospital to examine the pain in my stomach. But, results were nothing was wrong with my stomach. The doctor told me to relax. We ourselves are not easily going to agree that our body is damaged by many mental and physical tasks. We often ignore the whispering of our body asking for rest. Even though we listen to that, we reject to do it. Nowadays, I can understand that these kinds of difficulties are also a part of foreign student life. At the same time, we should not be lazy to try to change such difficulties into joy.

I am often asked about Japan and Japanese because I have been here a long time. The answer is that I don't know as much about it as I thought. Many people still have some questions why my answer is so ironic despite I had to touch the Japanese life. I used to see, feel, think and evaluate others through my own window and my own yardstick. I tried to do my best to melt into Japanese style. However, I knew that there is some gaps which are unsolvable natural hurdles. It took a long time for me to get the wisdom to treat such afflictions. Personally I think Japan is very unique country. They have their own unique life style which is quite different from that of other countries. I have heard of many opinions from many foreign students about

their life in Japan. It was in great variety. Conclusively, I would like to say there are more things to learn from them than those to criticize. Rarely, I ask myself whether a certain situation is taken place from my AMAE. Even now, I sometimes can not clearly understand a certain situation. I think it is because that Japanese are usually very kind, and they don't clearly say a negative answer. After all, I knew that I should not have to make others be melted into my philosophy but admit what it is and accept what it is. And then, it will change into thanks for given opportunity to know different cultures of another country. This kind of thinking will also be one of desirable ways to reach successful foreign student lives flowing with real joy and peace.

I would like to raise one more thing which makes our foreign student life a wonderful life. I have two tough sons with my wife. Even though I am a MONBUSHO scholarship student, that scholarship is not enough for my four member family. Therefore, my wife helped our income every month by doing part time jobs, i.e., folding and packaging T-shirts, working in a flower farm, and working in a supermarket. I and my wife were physically very tired. Sometimes though, I felt very sorry and much thanks to my wife. I could not say anything but just say "I love you". We encouraged one another and comforted one another. Of course, hard time was just like a long, long dark tunnel, but we are going to go out of this unforgettable tunnel. Interestingly enough, my two kids need interpretation in phone calls with their grandmother. They are almost native KANSAI people. They also might have the same feeling that I mentioned above as a foreign student, and abruptly know how to survive and adapt in new circumstances. For the whole time in Japan, we went to church every Sunday. We prayed and prayed for every need while doing our best. When we had our family prayer time before going to go to bed, we would say to one another "I love you" and "good night". There are real joy, peace and love which are essential nutrients in our life. We are going to go to America this coming March. We don't know about tomorrow, but we don't need to worry about tomorrow; because we got the wisdom to drive our life into real joy and peace through the foreign student life in Japan. Don't forget to try to have relaxation time, positive way of thinking and family support with love! Those will be the key to get a successful foreign student life. Thank you so much!

留学生室ニュース

農学部私費外国人特別選考試験

平成6年度の私費外国人特別選考試験は3月1日に実施され、1名が応募しましたが不合格でした。

農学研究科博士後期課程編入学考査

平成6年度農学研究科博士後期課程編入学考査は、1月26日(水)、27日(木)に行われ、21名が合格しました。このうち私費外国人留学生は林学専攻(中国)、農芸化学専攻(韓国2名)、農業工学専攻(韓国)、水産学専攻(韓国)、林産工学専攻(台湾、中国)、食品工学専攻(韓国2名)、畜産学専攻(韓国)の10名でした。

留学生の博士号取得状況（平成5年1月～12月）

当該1年間に京都大学農学研究科に博士論文を提出して、京大博（農）の学位を授与された外国人研究者は21名で、同博士課程修了の留学生は16名でした。

農学部国際交流推進後援会への入会案内

平成5年には個人会員169名、団体会員4件から御支援

交流の歩み（6）



ウィスコンシン雑感
(91年8月～92年5月 交換留学生)

庄 司 浩 一

(本研究科農業工業専攻)

1. 到着ショック

西海岸から二昼夜にかけて走ってきたバスを降りた。小さなバックバックにギターと愛媛みかんの段ボールをぶら下げて、手紙に示されている Union South へ向かった。全ての留学生は一度ここへ顔を出せというのである。どうせ書類のチェックをして簡単なガイダンスを受けるのが関の山であろうと考えていたが、予想に反してそこはお祭り騒ぎであった。学校のスタッフだけでなく、地元のボランティアや学生のバイトも混ざって、到着した留学生にその日の宿（ホームステイ）さがしから下宿の斡旋まで種々のサービスを夜の11時まで行っていた。やれやれ野宿せずすんだと思った。

ウィスコンシン大学では、秋学期の始まる前に Welcome Week というイベントがあり、さらにその一週間前に初めての留学生を受け入れるために上のような特設会場を設けている。単に便宜をはかるだけでなく、早くアメリカの生活に慣れるようにセミナーも催され、友達の作り方・授業での生き残り法といったものから、AIDS・デートレイプ・同性愛者の人権問題にいたるまで様々な問題を扱っていた。これは留学生に限ったことではないが、新しく入ってきた学生のために様々な悩みやトラブルを想定した小冊子が作られており、現にそのような問題に直面しなくとも、いざというときの相談・連絡先を知っているというだけでも心強かった。私はカルチャーショックをあまり感じない人間であるが、このときばかりは大学の方の細かな心遣いにかえって戸惑いを覚えたほどであった。

2. 友人について

予算の都合で寮形式のアパートに住むことに決め、パキスタン人、フィリピン人、香港人のルームメイトと生活を共にした。私は関西弁風の少々どぎつい英語をしゃべり、背も高くいつもボリビア製のバッグをぶら下げていたのでかなり目立ったらしく、またたくまにしゃべる友達が多かった。そういう意味では恵まれていたのだが、そのうち仲の良い研究室の人やクラスメイトは決まって中国人・インド人・アラブ人といった留学生である傾向が見られるようになった。留学生室 (International Student Office) の人によるとこれはべつにおかしいことではなく、境遇の似た者同士は共通の話題も多く、親しくなる機会が多いという。私

を得て、留学生用新聞・雑誌新入生歓迎会、卒業・学位取得者への記念品等に支出しております。つきましては、より一層の幅広い方々からの入会、さらには卒業・修了後も日本国内の会社や研究機関で活躍されている元留学生の方々からの入会を期待しております。同後援会についてのお問い合わせは農学部留学生室までお願いします。

見であるが、「留学生」という母集団の中には一癖ある人の割合が多いように思われるし、お互いに早く友人を作りたいという願望も強いようである。ルームメイトのフィリピン人は超ガリ勉であったし、クラスメイトのヨルダン人は自分の理屈が通らなければ徹底抗戦する人であった。

逆にアメリカ人の友人も作りたいと考えていたが、これは容易ではなかった。英語の力が不足していたといえそれまでであるが、アメリカ人同士の会話を聞いていると、彼らのほとんどが州内出身者であったためか、以心伝心の如くフィーリングでしゃべっていることが多く、相手方が私に興味を示さない限り、なかなかコミュニケーションが始まらなかった。もっとも、私の方にもそうそう簡単にアメリカナイズされてたまるかいというらいがあったことも認めざるを得ない。私の歳（当時23才）では既に全てを適応させることができるわけではなかった。しかしながら私に対してそれなりの理解を示してくれた人たちもいて、彼らとは今でも親しくつきあっている。

それでは現在農学部で自分のまわりの留学生とどのようにつきあっているかといえば、これまた及第点をつけることができない。やはり日本人としゃべっている方がコミュニケーションにかかるエネルギーは少なく済むし、留学生に対してはどうしてもお客様の態度をとりがちである。しかしながらウィスコンシンにいたときのように、国境を越えて魅力のある人とは仲良くなりたいたいと思っているし、自分がアメリカ人の友人を作りたいと思っていたときの心理を思い出して、彼らに話しかけるときは英語の方が楽だと分かっているにもかかわらず極力日本語でしゃべるようにしている。



留学生向け英作文クラスのクラスメート
(ウィスコンシン大学'91冬)

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話 (075)753-6298, 6299

印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話 (075)441-3155~8